

(4) 道祖神どうそじんにみる歴史的風致

ア はじめに

道祖神は広く全国に分布する路傍の神ですが、特に関東甲信越地方に多く見られます。松本市内の道祖神碑の総数は600基を越え、四賀地区を筆頭に市域の東側に多い傾向が示されています。塞さいの神、道陸神かみ どうろくしんと呼ばれることもあります。松本では多くは道祖神と呼ばれます。

松本市内の道祖神のうち、4割が双体道祖神と呼ばれる男女一對の彫像で、残りは文字碑です。市内で最も古い紀年銘のある道祖神は、今井地区古池集落のもので、正徳5年(1715)に造られています。

旧市内の小字を見ると、「サイノカミ」が23カ所に対し「ドウソジン」は6カ所と少なく、古くは塞の神と呼ばれていたものが、石碑が刻まれるようになる近世には道祖神と呼ばれるようになったのではないかと思います。

松本市では、道祖神の多くは集落の入口(村境)に祀られています。その場所からは集落内に災いが侵入するのを防ぐ境の神としての性格がうかがえます。一方で、抱肩像ほうけんざうや祝言像などの男女一對の像容から、縁結び又は子孫繁栄の神様としても信仰されてきました。

江戸時代には、ムラが繁栄するとそのムラの道祖神が盗まれるということがあり、これを「道祖神の嫁入り」といいます。横行する道祖神盗みを拒むため、この道祖神を盗むと十両の結納金をいただくという意味の「帯代十両」と刻まれている道祖神もあります。このことは、道祖神がムラの繁栄と大きく関わる神であると認識されていたことを示しています。

松本市内に数多くみられる道祖神を中心として、その集落で様々な行事が行われています。



路傍の道祖神



今井古池の道祖神

イ 歴史的風致を形成する建造物

(ア) 道祖神

a 御柱けみに関する道祖神

花見の道祖神(梓川地区)

御柱を実施している花見地区の上手町、中町、下町のそれぞれの集落に道祖神があります。上手町の道祖神は集落の入口の道沿いにあり、双体道祖神で、文化11年(1814)の紀年銘があります。中町は道祖神碑が二つ並んでおり、左側の大きな道祖神碑は文字碑で、嘉永6年(1853)の紀年銘があります。右側の小さな道祖神は双体道祖神碑で文字は刻まれていません。下町も二つの道祖神が並んでおり、一つは双体道祖神碑、もう

一つは文字碑です。双体道祖神碑には嘉永4年（1851）、文字碑には寛政8年（1796）の紀年銘があります。



花見の道祖神（上手町）



花見の道祖神（中町）



花見の道祖神（下町）

よこざわ
横沢の道祖神（梓川地区）

横沢の御柱は中と西下の二つの集落で行われており、それぞれに道祖神があります。中の道祖神は双体像で、文化8年（1811）の紀年銘があります。西下の道祖神は双体道祖神碑で、文化2年（1805）の紀年銘があります。この道祖神碑には「帯代十両」の文字も刻まれています。



横沢（中）の道祖神



横沢（西下）の道祖神

内田の道祖神

いずれの道祖神も文字碑です。横山の道祖神には享和元年（1801）の紀年銘があります。北花見、荒井の道祖神には紀年銘がなく、年代が不明です。



内田（横山）の道祖神



内田（北花見）の道祖神（左）



内田（荒井）の道祖神

b コトヨウカに関する道祖神

おっくら
追倉の道祖神（入山辺地区）

集落の入口に道祖神碑と青面金剛像碑が並んで祀られています。道祖神碑は双体像で、裏面に明治33年（1900）の紀年銘があります。紀年銘のある双体像の道祖神としては、山辺地区で最も新しいものです。



追倉の道祖神



舟付の道祖神



上手町の道祖神



中村の道祖神



奈良尾の道祖神



厩所の道祖神



今井下新田の道祖神



両島の道祖神

ふなつき
舟付の道祖神（入山辺地区）

薄川左岸の河岸段丘上にある舟付集落の道祖神で、集落の北からの入口にあたる道沿いにあります。文字碑で裏面に銘文があり、天保6年(1835)に建立されたものです。

わでまち
上手町の道祖神（入山辺地区）

集落に入ってきた道が分岐している場所に、蚕玉神社の碑とともにある双体道祖神碑で、紀年銘はありません。神殿の表札に「道守神」と刻まれています。

中村の道祖神（入山辺地区）

集落の入口に庚申塔、念仏供養塔などと並んで2基の道祖神があります。1基は双体道祖神碑で、表面に天保15年(1844)2月8日の紀年銘があります。裏面の銘文から、高遠石工の藤森吉弥と松本石工の重森文四郎によるもので、松本市内の道祖神の中でも優品として知られています。もう1基は文字碑で「祖道神」と刻まれている珍しいもので、紀年銘はありません。

奈良尾の道祖神（入山辺地区）

2基の双体道祖神碑が並んでおり、ともに紀年銘はありません。

厩所の道祖神（入山辺地区）

集落の入口にある双体道祖神碑で、紀年銘はありません。神殿の左右に「奉納道祖神」と刻まれた幟が彫られています。

今井下新田の道祖神

他の碑とともに下新田公民館の前にあります。文字碑で紀年銘はありません。かつては現在の場所より北側の道の入口にあり、昭和44年（1969）に移設されたことが、同年刊行の『今井の道祖神 史談手帖1』に写真とともに紹介されています。

両島の道祖神

2基の道祖神が並んでおり、向かって左側は平成5年に建てられた双体道祖神碑です。右側の道祖神は文字碑で、紀年銘はありません。

ウ 活動

(ア) 御柱

a 概要

塩尻市北部から松本市、安曇野市にかけての地域では、毎年正月に「御柱」又は「おんべ祭り」と呼ばれる行事を実施する地区が点在しています。かつては千国街道沿いに御柱行事が見られ、今も安曇野市豊科ではあめ市の日が御柱を倒す日に当たっています。

この行事はいわゆる神社の御柱ではなく、正月、道祖神に飾付けを行い、道祖神が祀られている場所に五色の紙や飾り物で彩られた柱を建て、年神を迎えて五穀豊穡や家内安全などを祈るものです。

建てられた御柱は七日正月や二十日正月に倒され、飾った御幣などはムラの各家に配り、戸口に飾るなどして魔除けとします。

現在、松本市内で御柱あるいはおんべと呼ばれる行事が行われているのは、内田地区の3つの集落と梓川地区の花見と横沢、波田地区の上波田です。

御柱あるいはおんべがいつ頃から始まったのかは不明ですが、江戸時代の松本城下町では、天明4年（1784）の菅江真澄のスケッチや、「高美甚左衛門日記」にも天保年間（1830～1844）までは初市の日（正月11日）に御柱が建っていた記録があります。

昭和40年（1965）刊行の『東筑摩郡 松本市・塩尻市誌』には、その当時の実施地区として片丘、波田、神林が挙げられています（片丘は当時の片丘村のことで、内田地区を含んでいます）。また、昭和43年（1968）刊行の『南安曇郡誌第二巻下』には、梓川地区の御柱の実施時期等について記載があります。

b 内田地区の御柱

内田地区の横山、北花見、荒井の3つの集落では、小正月に御柱が道祖神の近くに建てられ、二十日正月に倒されています。北花見と荒井の御柱は、昭和6年（1931）刊



内田（北花見）の御柱

行の『東筑摩道神図会』に写真とともに掲載されています。

3つの集落では、小正月の頃の休日に御柱が建てられます。御柱は、前日に飾りがつくられ、当日の朝からおんべの柱に飾付けが行われ、道祖神のある場所に運ばれて建てられます。おんべは20日ころに倒され、飾られていたかざりは各戸に配られます。かざりは魔除けとして家の玄関先などにおかれます。



内田（横山）の御柱



内田（荒井）の御柱

c 梓川地区の御柱

梓川地区では、花見と横沢で御柱が行われており「花見の御柱」、「横沢の御柱とスースー」として、それぞれ松本市重要無形民俗文化財に指定されています。

花見の御柱は上手村、中村、下村の3つの集落で、1月1日に御柱が建てられています。かつてはそれぞれの集落で道祖神碑のある場所に御柱を建てていましたが、現在は3つの集落で1つの御柱を建てています。

1月1日の朝5時頃、子供たちが3カ所にある道祖神碑にそれぞれお参りし、その帰りに「御柱建てに来ておくれや」と大人を起こして歩きます。6時頃に大人たちが集まってきて、御神酒をいただき、身を清めてから子供たちと、日の出とともに太陽の方向に向けて御柱を建てます。無事に御柱が建つと、みんなで「おめでとう」と新年の挨拶を交わし、大人たちは御神酒を、子供たちは餅を食べます。御柱は1月5日の早朝に倒され、オンベは各戸に配られ、無病息災のお守りとなります。

横沢では、中区の一部と西下の2カ所で御柱が行われており、1月2日に建てられ、1月20日に倒されています。中区では昭和36年（1961）に行事が中断しましたが、平成2年（1990）から復活し、保存会が結成されて現在まで続けられています。御柱を建てる1月2日の朝、子供たちが5色のオンベを持って家々を回り、「スースー ドウソジンノオンマエモウス」といってお金を集め、「今日は御柱を建てるから集まってください」と触れて歩きます。子供たちが家々を回ることは「スースー」とよばれており、昭和36年（1961）に御柱が中断した後も「スースー」



花見の御柱



横沢（中）のスースー

は継続して行われてきました。午後には大人が集まり、用意した材料で御柱の飾付けをし、道祖神近くの決められた場所に御柱を建てます。

西下でも午後には大人が集まり、飾り付けをした御柱を建てますが、子供は行事に参加せず「スースー」も行われていません。



横沢（中）の御柱



横沢（西下）の御柱

d 上波田の御柱

上波田では、かみちょう なかちょう しもちょう上町・中町・下町の3か所で、1月5日前後に御柱が建てられています。

上波田の御柱は、内田や梓川の御柱と行事の内容や御柱の形式は共通していますが、道祖神のある場所ではなく、神社の祭礼の際にのぼりを立てる場所に建てられており、道祖神との関わりも意識されていません。

御柱を建てる日の前日に、5色の色紙でオンベなどの飾りを子供たちが作ります。御柱を建てる日は、未明から子供たちが「御柱建てに来ておくれやーい」と集落内を呼んで歩きます。大人たちが集まると、10mを超える長さの御柱に飾り付けを行い、神社の幟を建てる場所に御柱が建てられます。

御柱が倒されるのは成人の日前後で、未明から子供たちが「御柱倒しに来ておくれやーい」と集落内を呼び歩きます。大人たちが集まると御柱が倒され、御柱につけられていたオンベは、子供たちが集落内の各戸に配り、隣接する中波田の各戸を回ってオンベを売り歩きます。

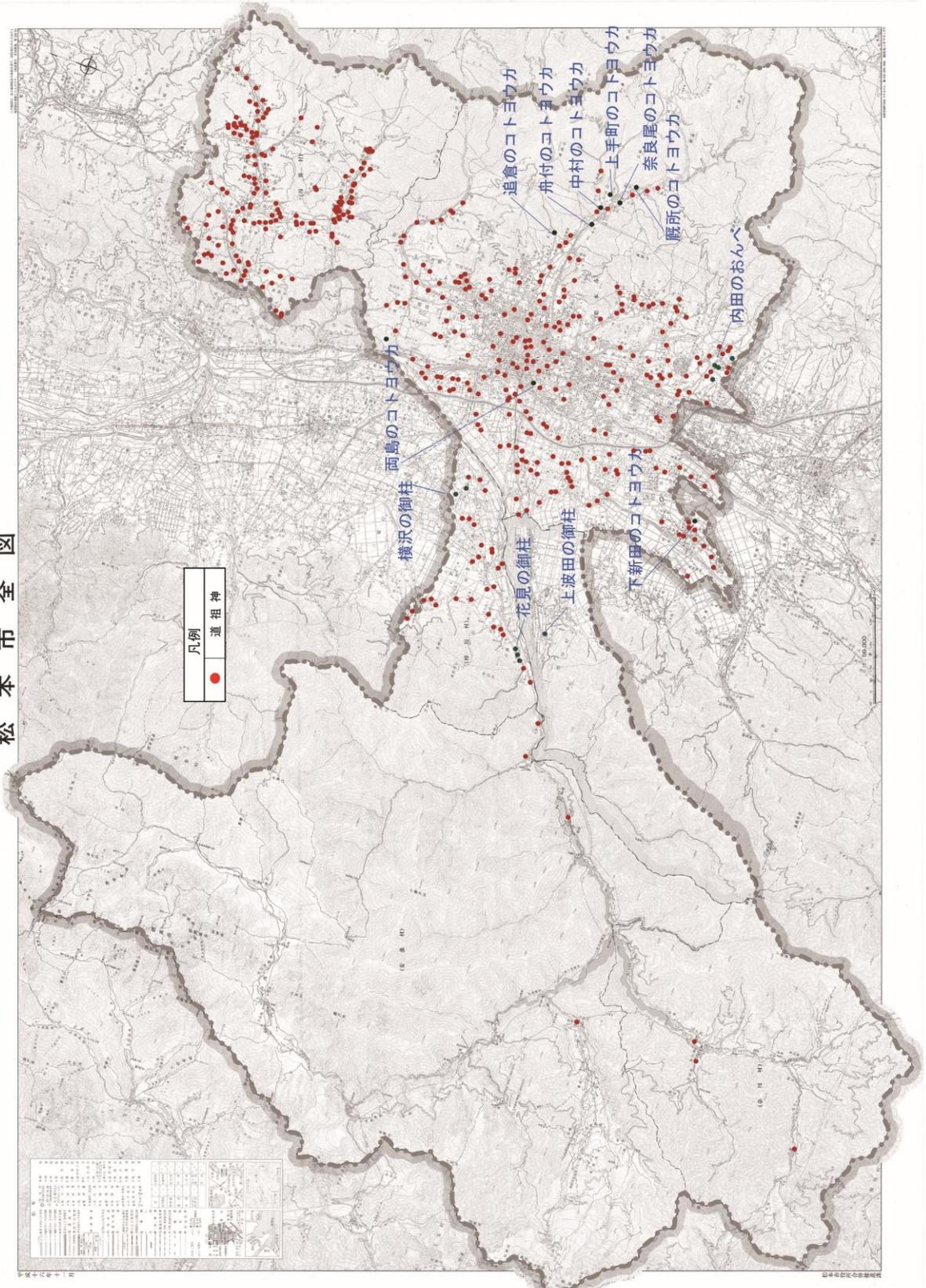


「御柱建てに来ておくれやーい」と集落内を回る子供たち（下町）



上波田の御柱（右から上町、中町、下町）

松本市全図



道祖神、科トヨウカ、御柱（おんべ）の分布図

(イ) コトヨウカ

a 松本のコトヨウカ行事の概要

2月と12月の両月の8日はコトヨウカと称され、全国各地で多様な習俗が伝承されています。特に東日本では、この日に厄神や妖怪などの神霊が来訪すると考えられており、そうした神霊に対する様々な行事が行われています。

松本市内では2月8日をコトヨウカ又はオヨウカと呼び、藁で馬や百足、草鞋などを作り、それらを呪物として村境に掛けて厄病神がやってくるのを防いだり、村境に送るなどの行事が見られます。

こうした行事は、2月8日やその周辺の休日に行われ、市域の東部にある両島、今井下新田、薄川の流域にある入山辺の厩所・上手町・奈良尾・舟付・中村、里山辺の追倉の8地区に伝承されています。

これらの地区では、この日の早朝に餅をつき、これを道祖神に供えたり、塗りつけたりするところがあります。誰にも見られずに道祖神に餅を塗りつけると、良縁に恵まれるという言い伝えもあり、入山辺地区では、この頃に餅を塗られた道祖神を見ることができます。また、集落内の家では、朝早くヌカエブシといってネギや唐辛子など臭いにおいのものを^{もみがら}糲殻に混ぜて門口で燃やします。臭い匂いによって、貧乏神や疫病神が家の中に入らないようにし、追い払うものです。

家の外に追い出された厄病神は、馬や龍などのツクリモノに乗せられて集落の外に送り出されます。かつては、疫病神が集落から隣の集落へと順に送るように行事が行われていたと考えられますが、現在は行われなくなっています。

b 入山辺、里山辺地区のコトヨウカ

薄川上流域の入山辺、里山辺では藁で馬や百足などを作り、これを厄病神に見立てて集落の外へ送り出したり、焼き払う行事が行われています。

入山辺の奈良尾、上手町、厩所では、藁馬を集落境まで曳き回し、焼き払います。藁馬は、体長2メートルほどで、藁で作った人形2体が載せられます。

奈良尾と上手町では、夕方から大人が公民館や当番の家で藁馬を作り、大人と子供で「貧乏神ま



道祖神に餅を塗り付ける（厩所）



ヌカエブシ（舟付）



藁で馬を作る（上手町）



藁馬を曳き回す（上手町）



集落境で藁馬を焼き払う（奈良尾）

くりだせ」と声を掛けながら、集落境まで曳いて行き、焼き払います。その後、公民館や当番の家に帰り、皆で粕汁をいただきます。この行事を奈良尾では「カスネンブツ（粕念仏）」、上手町では「ビンボーガミ」と呼んでいます。

厩所では、かつては子供たちが行っていました。今は高齢者が行っています。公民館に藁を持ち寄り、馬と2体の人形を作ります。できあがった馬を中心に車座になり、鉦を叩いて音頭をとりながら大きな数珠を回して念仏を唱えます。念仏が済むと馬を担ぎ、鉦をたたきながら「貧乏神追い出せ、貧乏神追い出せ」と声を掛けながら集落の外れの薄川沿いまで行きます。そこで念仏を唱えた後、藁馬に火を放ち燃やします。その後は後ろを振り向かず、集落へ帰っていきます。振り返ると厄が付いてくるといいます。厩所ではこの行事を「ビンボーガミ」と呼んでいます。

中村と舟付では藁で百足を作ります。中村では、夕方から大人たちが公民館に集まり、藁で綱を作るようにして、8mほどの長さの百足を作ります。作った百足に小学6年生の子供を乗せ、下級生が鉦をたたきながら大きな声で「ナンマイダンボ、ナンマイダンボ」と念仏を唱えながら集落境まで曳いて行きます。曳いて行った百足は道沿いの土手に丸めておき、後日焼き払います。曳回しが終わると直会となり、皆で粕汁をいただきます。中村ではこの行事のことを「カスネンブツ」と呼んでいます。

舟付では2月8日周辺の休日に行われ、午前中に当番の大人が公民館に集まり、長さ5mほどの百足を作ります。午後に子供たちが百足を曳き、百足の尾で家々の門口のヌカエブシの燃えがらを掃きながら集落内を回り、最後に集落境で焼き払います。子供たちが百足を曳き回している間、大人は公民館に集まり、車座になって念仏を唱えた後、子供たちと一緒に直会をします。

里山辺の追倉では近年まで藁で龍を作り、その年の当番の家で作った龍を使って男女が綱引きをする行事が行われていました。女性が勝つとその年は五穀豊穡、無病息災が約束されるといい、毎年女性が勝つことになっていました。現在は戸数が減り、大



数珠を回して念仏を唱える（厩所）



藁で百足を作る（中村）



百足に子供を乗せて曳き回す（中村）



百足で燃えがらを払う（舟付）



百足を焼き払う（舟付）

きな籠を作ることができなくなったため、綱引きは行われていません。籠の代わりに縄を作り、念仏を唱えて道祖神に巻き付けることが引き続き行われています。

c 両島、今井下新田のコトヨウカ

両島と今井下新田では藁で大きな足半あしなかを作り、念仏をした後で、集落境や集落内の辻などに足半を掛けます。集落を訪れる厄神は大きな足半を見て、巨人のいる集落には入れないと引き返すのだといわれています。また、この日訪れる神は一本足の大男だといわれ「この草履をはいて帰ってください」という意味だとも言われます。

両島では、2月11日に大人のみで行事が行われています。朝から公民館に集まり、1m以上ある大きな足半を作ります。できあがった足半は祭壇に飾られ、その前で皆で車座になって大きな数珠を回しながら念仏を唱えます。それが終わると、南北の集落境の大きな木に足半を掛けます。両島の足半は、明治時代に流行病の治癒祈願から始まったといわれています。

今井下新田では2月8日周辺の休日に行事が行われています。朝から公民館に町会の役員が集まり、藁で50cmほどの大きさの足半を5つ作ります。午後になると公民館に各戸から人が集まり、お寺の住職を招いて大きな数珠を回しながら念仏を唱えます。それが終わると、足半を集落境と辻の5か所に掛けます。草履には「南無阿弥陀仏百万遍」と書かれた紙のお札が添えられています。



足半を作る
(両島)



足半を作る
(今井下新田)



村境に架けられた足半
(両島)



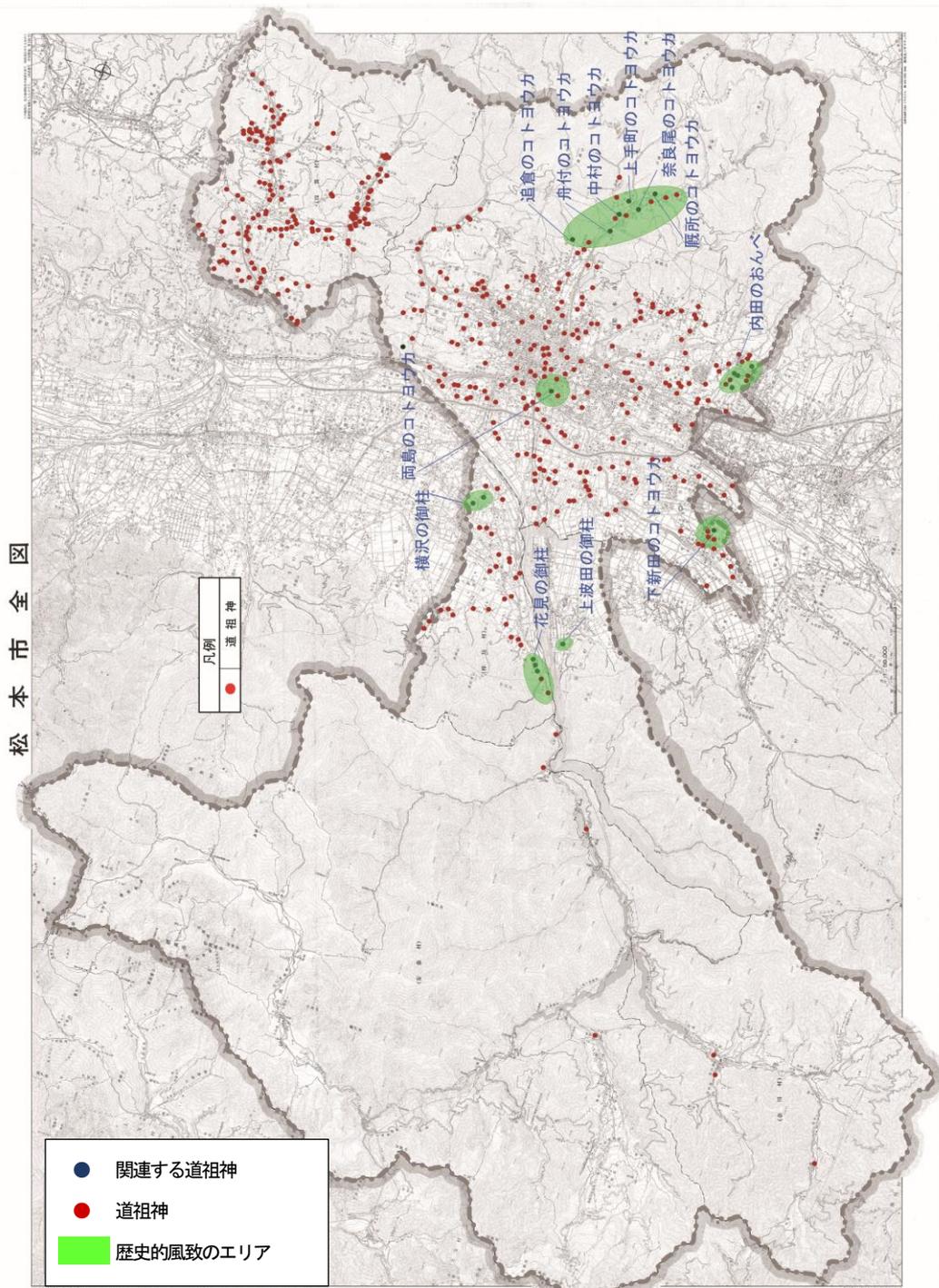
村境に架けられた足半
(今井下新田)

松本のコトヨウカ行事がいつごろから行われていたのか不明ですが、昭和39年(1964)刊行の「信濃・松本平の民俗と信仰」には、里山辺追倉の綱引き、今井下新田と両島の足半行事が掲載されています。また、昭和18年(1943)刊行の「東筑摩別編第二 農村信仰誌 庚申念仏篇」には、「二月八日の「粕念仏」」として、入山辺宮原の行事が念仏講の観点から記載されています。現在宮原地区では藁の作り物を作る行事は行われていませんが、かつては中村や舟付のように、百足を作って行事を実施していたこと、また奈良尾、中村では、コトヨウカの行事を「粕念仏」と呼んでいることから、この時期には入山辺のコトヨウカ行事が行われていたと考えることができます。

Ⅰ まとめ

松本では、集落の入口や辻などにある道祖神が、無病息災、子孫繁栄、五穀豊穰などムラの繁栄につながる万能の神様として、今も信仰されています。道祖神が祭られている風景の中、新春の1～2月にかけてムラの繁栄を祈る習俗が、市内のあちらこちら

で行われ、それらの人々の活動は厳しい冷え込みの冬を乗り越え、春を待ちわびる人々の心のよりどころとなり、歴史的風致を形成しています。



歴史的風致のエリア